

巻 頭 言

本18号には、事業団設立20周年記念関連事業と銘打って開催された「第19回研究発表会」の内容が収録されている。事業団創業からの満年数、研究発表会の回数、研究紀要の号数はそれぞれ各マイナス一つの関係がある。創業開始から約1年半の間は業務を軌道に乗せるのに多忙をきわめ、初回研究発表会は満2年目からの開催になり、研究紀要は研究発表の収録をよりどころとするため、初刊発行はさらにその翌年になったわけである。

それでも、研究発表会開催と研究紀要発刊という研究活動推進の両輪とも言える作業を最短の時系列のなかでテイクオフさせることで、事業団におけるリハビリテーション研究活動の推進エンジンを始動させることができた。その後20年間一度も休まずに継続してきたことは、リハビリテーションに関するわが事業団の知の集積を図るといふ点でわれわれの財産作りに一役買うことができたように思う。

本号に収録された職員の論文とともに、「20年の歩み」「発達障害・中途障害両部門の今後の方向性」「歴代センター長による鼎談」にじっくり目を通していただきたい。「歩み」と「今後の方向性」では、事業団の20年を準備期と、それに続く創成期、展開期、拡充期、変革期の5つのフェーズに分け、時代と共にわれわれが何を考え、どのようにリハビリテーションを実践してきたか、今後何を目指そうとしているのかが、簡潔明瞭に記されている。「鼎談」では、歴代センター長のうん蓄に富む語りが披露されている。20年という歳月をしっかりと歩み続けてこられたことを率直に喜ぶとともに、今後の方向性が眺望できたら幸いである。

20年の重みを噛みしめながら、事業団の創造的な変革を達成するために疲弊した部分を修復し、新たな活力を生み出していく気概と覚悟をいま一度しっかりと持ちたいものである。紀要に対してもまたしかりである。夢中になることができ、わくわくした仕事がたくさんできればできるほど、自然と研究紀要のレベルアップが図れるはずである。事業団職員の「やる気」と「業績」を結ぶ架け橋となること、これが私の研究紀要に期待してやまない想いである。

横浜市総合リハビリテーションセンター

センター長 田 中 理